

活動一覧

学内での活動（講義、論文指導、制作指導を除く）

- 1 教務委員会
- 2 学内プロジェクト
「まちをデザインするプロジェクト」で学生と共に美濃プロジェクトを支援

学外での社会活動（公的活動）

- 1 倉敷芸術科学大学現代表現コース 集中講義 7月14日
アートユニット「KOSUGI+ANDO」としての表現活動、インスタレーションについて特別講義
- 2 「大垣イルミネーション」委員
平成14年大垣イルミネーション開催に向けての実行委員会参加

学外での社会活動（個人制作活動）

- 1 作品制作・発表 『二番目の埋葬』
5月14日（土）～6月11日（土）、神戸のギャラリー「夢創館」にて作品『二番目の埋葬』（新作）を制作・発表。（概要は、後述）
- 2 作品制作・発表 『遷移状態』
10月8日（土）～29日（土）、大阪のアートスペース、非営利法人「CAS」にて、作品『遷移状態』を制作・発表。（詳細は、後述）
会期内10月15日、アーティストトーク 司会、室井絵里

1 作品『二番目の埋葬』 概要

作品タイトル：二番目の埋葬 Second Burial

日時：5月14日（土）～6月11日（土）

場所：「夢創館」（神戸）

このインスタレーション作品は、2011年3月11日の原発事故後、その被害が拡大する時期に制作された。タイトルの「二番目の埋葬」は、3.11の福島第一原子力発電所の破壊・死（最初の埋葬）から、遠い未来における廃炉（二番目の埋葬）への長い道のりを暗示する。これは1995年開催の「第6回福井ビデオビエンナーレ」での発表作品「Innocent Babies」の福井県立美術館での展示部分「埋葬」を受けたものでもある。

作品形態

作品は、①原発を象徴する「鉄製ベッド」、それを取り囲む1脚の椅子と、数十個のミニチュア椅子の列など、幾つかのオブジェからなる光景、②それらをリアルタイムで撮影する二台の移動・回転するカメラ、③二つのカメラからのリアルタイム映像と既撮影映像が合成処理され、壁面に投影された映像。これら複合的な三要素で構成される。



作品全景

中央の鉛製の円形テーブル上に、鉄製ベッドと椅子が配置。
右側面、左円形壁面に、ミニチュア椅子の配列。
正面にプロジェクター投影映像。



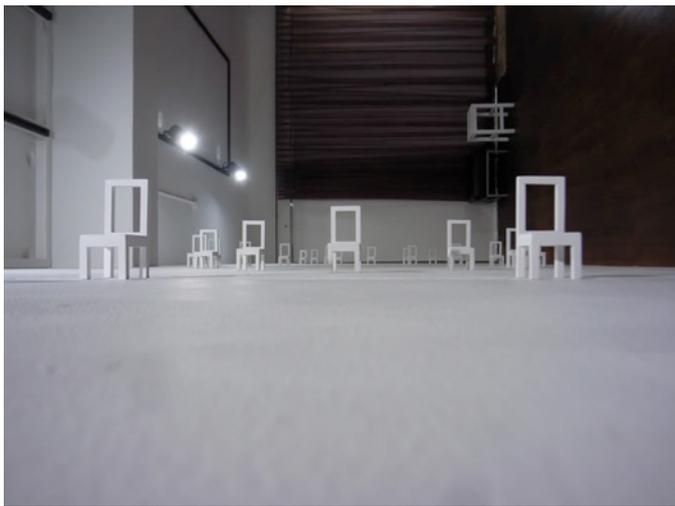
右壁面、ミニチュア椅子の配列

壁面上を上下に移動するビデオカメラがリアルタイムにその光景を撮影する。

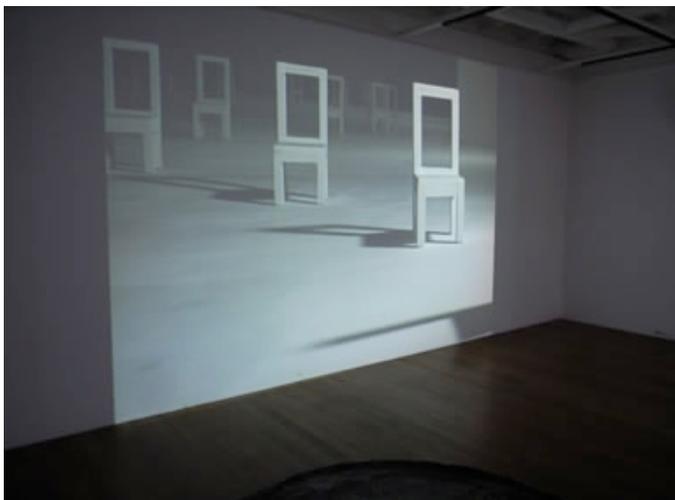


鉛で覆われた円形テーブル、割れ目から草が伸びる。原発を象徴する鉄製ベッドと、それを見守る白い椅子。天井からビデオカメラが回転しながらリアルタイムで俯瞰撮影する。

背後の円形壁面にミニチュア椅子の配列。



右壁面、ミニチュア椅子、ビデオカメラからの視線。（写真右側が床面）



右壁面、ミニチュア椅子のリアルタイム撮影映像。この映像に既撮影の映像が重ね合わせられる。

作品解説（一般向け）

二番目の埋葬 Second Burial

この作品は、2011年3月11日の原発事故後、その被害が拡大する時期に制作されたものです。タイトルの「二番目の埋葬」は、3.11の福島第一原子力発電所の事故を、最初の破壊・死、「一番目の埋葬」としてとらえ、また遠い未来における廃炉を「二番目の埋葬」ととらえることで、そこにいたまでの長い道のり、人が原子力発電を見守りつづけなければならない長い期間を暗示するものです。

この作品は、画廊内部の空間全体が一つの作品となるインスタレーション（仮設空間作品）という形式を持っています。部屋の中に配置された鉄製ベッドや椅子、壁面に設置された数十個のミニチュアの椅子、それらが一つの架空の風景を提示します。配置されているのは具体的なもの（オブジェ）ですが、それらはどこかにある現実の風景を再現するというものではなく、原発事故を受けての、私たちの思考やイメージの配置、具体的なものをういた抽象的な概念図とも言えるものです。鉄製のベッドと白い椅子は原発とそれを見守る人を暗示しています。

この作品で特徴的なのは、二つの自動的に動くビデオカメラと、それらのビデオカメラからの入力を元にする映像で、それらがある一定の時間おきに、切り替わり、画廊正面の壁面に投影されます。一つのビデオカメラは、壁面上を上下に移動（パン）するもので、壁面に並ぶミニチュア椅子の群れを横から眺めるような形で撮影し、もう一つのカメラは、天井に取り付けられ、床上の鉄製のベッドをゆっくり回転しながら俯瞰するものです。

壁面に沿ったカメラの上下の動きは、投影された映像では90度回転したものとなり、カメラのズーム効果を伴うことで、広い地平面上に並ぶ実物大の椅子の群れを、横から移動撮影をしているような印象を観客に与えます。リアルタイムで撮影されたこの映像は、それ以前に撮影された映像と重ね合わされることによって、その映像の持つ時間・場所と、観客のいる時間・場所との関係を不確かなものにします。

一方、天井からのビデオカメラは、鉛のテーブルの上に置かれた鉄製ベッドを真上から俯瞰しているのですが、ゆっくりと、鉛の割れ目から覗く土壌や草へと回転をとめないながらズームングしていきます。

このように、具体的なオブジェ群とそれを眺める二つのカメラの目で構成されたこの作品は、一つの光景とそれを眺める視線という階層的な構造を持っているので、観客もまた一つの光景を眺めるだけでなく、それを見る別の目線（カメラ）を受け止めるといった、複数の視線をもった鑑賞が求められることとなります。

2 作品『遷移状態』 概要

作品タイトル：遷移状態 Transition State

日時：10月8日（土）～29日（土）

場所：「特定非営利法人 CAS」（大阪）

3月の原発事故を受けて5月に神戸で展示した前作「二番目の埋葬 Second Burial」の続編／対となる作品。遷移状態とは、安定状態から安定状態へと至る途中の過程、一種の高エネルギー状態をいう。それは「彼ら」（福島第一原子力発電所）をあたかも手なづけているかのような幻想を与える「冷温停止」という言葉の裏面にある状態であり、一見普通の日常が展開する福島市内、そして私たちの身の回りの現在の風景でもある。

作品形態 作品空間は以下の三つの状態を推移する。

- 1 暗い室内にある鉄製ベッドと白い椅子、ベッド上で回転するガラガラ
- 2 福島市郊外の田園風景の映像、気象情報の音声
- 3 二台の回転台とその上に載せられたスライド・プロジェクターが動作し始め、スライド写真がまわりの壁面にランダムに投影される。音声は放射線汚染情報に次第に変化する。

…再び暗闇にもどり、ガラガラがまわり始める。



会場風景1：
HDムービー映像、固定カメラ
（福島市田園風景）



会場風景2：
スライド写真ランダム投影
（福島市内）

作品解説（一般向け）

遷移状態 Transition State

この作品は、3月の原発事故を受けて5月に神戸で展示した前作「二番目の埋葬 Second Burial」の続編／対となる作品です。タイトルの「遷移状態」とは、安定状態から安定状態へと至る途中の過程、一種の高エネルギー状態をいいます。それは原発事故から半年を経て、それをあたかも手なづけているかのような幻想を与えようとする「冷温停止状態」という言葉の背後にある状態であり、一見普通の日常が展開する福島市内、そして私たちの身の回りの現在の状態でもあります。

この作品も、先の作品「二番目の埋葬」と同様に、画廊内部の空間全体が一つの作品となるインスタレーション（仮設的空間表現）という形式を持っています。この部屋の中には、原発を象徴する一つの鉄製ベッドが置かれています。ベッドの上では赤ん坊（＝原発）をあやす「ガラガラ」が回転しています。それには、日本の原発がある都道府県のかたちをした飾りがとりつけられています。

この作品が前作と大きく異なるのは、作品が二つの空間の状態を持っていることです。その二つの状態間の変化、推移がこの作品の核となっています。

最初の状態は、穏やかな安定状態ともいえるもので、正面に固定カメラで撮影された農村の風景が投影されています。そこには風に揺れる麦の穂、田畑の向こう遠くで走る過ぎる白い軽トラックなどが撮られています。気圧・風力情報を告げるラジオ放送が流れています。数分後、映像が突然消え、スライド写真が投影され始めます。二番目の状態への変化です。

次の不安定な空間の状態は、まわりの壁面に投影されていくスライド写真によって形づくられます。床上に二台の回転台があり、それぞれにスライド映写機が載っています。この二台の映写機は、回転しながらまわりの壁面にスライド写真を断続的に投影していきます。写真は福島市内で撮られたスナップ写真で、どこの地方都市にでもありそうな、登下校する子供や商店の日常の風景です。しかしそれらは放射線量が決して低くない地域でもあるのです。映写機の回転は次第にスピードを増し、最後は狂ったように回転と静止を繰り返します。壁面上の写真は、矢次早に切り替えられ、明滅しながら壁面を滑るように流れていきます。一つの写真にじっと目を懲らすことはできません。農村を撮影しているビデオカメラの写真を最後に、部屋は再び最初の状態、農村の映像がゆっくりと流される安定した状態に戻ります。